

## 第4学年 社会科学習指導案

奈良教育大学附属小学校

教諭 辰巳 宗平

### 1. 単元名 「吉野杉を育てる人々のしごと」

### 2. 単元の目標

- 古くから伝わる川上村の林業のしごとについて知り、そのしごとが良質なブランド材である吉野杉の特長にどのように関わっているかを理解する。（知識・技能）
- 川上村の林業がこれまで続けてきたわけや、これからの林業が抱える問題について考え、川上村の豊かな自然や人々の暮らしを守っていくためにできることを話し合う。（思考・判断・表現）
- 川上村が守り続けてきた吉野林業や豊かな自然に興味をもち、意欲的に調べたり、まとめたりすることを通して、自分の暮らしとの関わりを見出そうとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

### 3. 単元について

#### (1) 教材観

川上村は、奈良県の南東部に位置し、吉野山地に囲まれた村である。気候や土壌が杉・桧の育成に適しているため、古くから林業が中心産業であり、まちづくりとも深く関わって来た。しかし、社会が変化していく中で、木材の需要は減少しており、林業労働者・生産量・木材価格が軒並み減少傾向にある。そのような中で、川上村は森林組合を中心として、吉野杉のPR活動を行ったり、端材を割り箸に加工して売り出したりと、新たなとりくみを行っている。

吉野林業は、土倉庄三郎が考えた「土倉式造林法」と呼ばれる植林法がとられている。この植林法の大きな特徴は、「密植」と「多間伐」である。苗の植え付けは、1haあたりに約3000本が一般的であるが、川上村では1haあたりに約10000本の苗を植え付ける。これが密植である。密集して植えられた苗は横方向には太らず、太陽の光を求めて競争することで、上方向に伸びていく。木が大きくなってくると、競争に負けたり病気にかかったりした育ちの悪い木が出てくる。逆に、成長しすぎて日光を遮ってしまい、他の木の成長の妨げになる木もある。このような木はその都度切り倒し、育ちの良い木を選んで残すことで、良質な木材を多く生産できるようしている。これが間伐である。こうしてゆっくりと時間をかけて育った木は、年輪が緻密で均一になり、吉野杉の特長である美しい木目をつくる。

このように、吉野林業を古くから受け継ぎ守ってきた川上村であるが、輸入木材の増

加や林業労働者の減少と高齢化など、さまざまな問題を抱えている。現在、川上村の林業労働者は70人を切っている。どのようにして林業という仕事や吉野杉を守っていけばよいのだろうか。消費者の立場から見た川上村の生産と労働に焦点を当て、自分たちのくらしとの関わりについても考えることができる魅力ある題材である。

## (2) 児童観

一学期に学習した「奈良県のように」の単元で、奈良県の地形・気候・人口・産業について地図を使って調べることを通して、同じ奈良県でも自分たちがくらす奈良市とは様子が全くちがう地域があることを確かめた。

「大和高原の茶づくり」の単元では、大和高原の田原地区へ社会見学に行き、大和茶の栽培から加工までの一連の流れについて学んだ。普段飲んでいるさまざまな種類のお茶は、ほとんどが同じチャノキの葉からできていることや、栽培と加工が別々のところで行われていることを知り、茶づくりにはたくさんの人の工夫や苦労があることに気づいた。また、大和高原が茶づくりに適した地形・気候であることを学ぶとともに、農家の方が直面する問題についても考えることができた。

## (3) 指導観

本単元の指導にあたって、まずは川上村のようすを知るところからはじめる。一学期に社会見学に行った大和高原の地形や気候、人口、産業などと比較させながら、川上村が一体どのようなところなのかを予想させる。そのなかで、川上村の95%もの面積を占める森林を、誰がどのようにして管理しているのかという学習課題をもたせたい。林業という言葉については、ここでふれておく。

川上村の社会見学では、杉林の見学を通して、木が大きく太くなるほど隣の木との間隔が広がっていることや、幹の低いところには枝が無いこと、本末同大の幹など、吉野杉の特長に気づかせたい。森林組合の下西さんからは、密植、下刈り、間伐、枝打ちなど、実際の林業のしごとについてのお話を聞く。しごとの内容だけでなく、大和高原の茶づくりの時と同じように、はたらく人の工夫や苦労、願いがあることに気づかせたい。

見学を終えてからは、吉野林業が抱える問題について確かめ、川上村の現状を知ってどう思うかを話し合わせる。豊かな自然の中で見た美しく壮大な杉林を守り、受け継いでいくために必要なことは何か。自分と関わることは何か。そのようなことにも目を向けながら、自分ごととして考える力を育てたい。

## (4) ESDとの関連

○ 本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

・ 相互性

林業というしごとを守ることが、川上村の豊かな自然や、生態系、わたしたちのくらしを守ることにつながっていること。

- ・ 有限性

輸入木材の増加、林業労働者の減少と高齢化により、国産杉の生産量は減少傾向にあること。間伐材を無駄なく使ったり、林業体験や地域の魅力発信をしたりして、吉野杉というブランド材を限りある資源として大切に扱っていくこと。

○ 本学習で育てたい E S D の資質・能力

- ・ 多面的・総合的に考える力

林業を木材生産として捉えるだけではなく、環境保全や川上村のまちづくりとも密接に関わっていることについて考える力

- ・ つながりを尊重する態度

生産者と消費者という関係でわたしたちがつながっていることや、林業にたずさわる人々の思いや願いを知ること。

○ 本学習で変容を促す E S D の価値観

- ・ 世代間の公正を意識できる

植え付けを行った人が、育ったその木を切ることではない。何十年、何百年もの間、吉野林業というしごとを受け継ぐ人々の手によって、吉野杉は生み出される。川上村を、吉野林業を、吉野杉を、どのようにして守っていくのかを考えなければならない。

- ・ 自然環境や生態系保全を重視する

川上村の水源地の森には、貴重な植生や生態が残されている。吉野林業を守ることは、川上村の豊かな自然を守ることにつながる。

○ 達成が期待される S D G s

1 5 吉野林業や水源地の森を守り、伝える

4. 単元の評価規準

(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
① 古くから伝わる川上村の林業のしごとについて理解している。 ② 良質なブランド材である吉野杉の特長は、林業のしごとと深い結びつきがあることを理解している。	① 川上村の林業がこれまで続いてきたわけや、これからの林業が抱える問題について考え、川上村の豊かな自然や人々のくらしを守っていくためにできることを話し合っている。	① 川上村が守り続けてきた吉野林業や豊かな自然に興味をもち、意欲的に調べたり、まとめたりすることを通して、自分のくらしとの関わりを見出そうとしている。

5. 単元の指導計画（全15時間）

学習活動	指導上の留意点	評価備考
1. 川上村のようすについて知る。 ・ 川上村の位置や気候、地形、人口	○ 一学期に学習した大和高原や、付小の周りとは比べさせる。	(ア) ①
2. 学習課題、見通しをもち、見学の計画を立てる。 ・ 川上村の大部分を占める森林は、誰がどのようにして管理しているのか。	○ 一学期に学習した奈良県南部の主な産業について思い出させる。 ○ 「林業」という言葉について教え、川上村の広大な土地でどのようなしごとをしているのか予想させる。	(イ) ① (ウ) ①
3. 川上村へ行き、250年生の杉林を見学する。 ・ 60年生の杉と、250年生の杉のちがいを確かめる。 ・ 川上村森林組合の下西さんから、吉野杉の特長や、吉野林業のしごとについての話を聞く。	○ 奈良盆地とちがいを、標高が高いことや、気温が低いことなどを感じとらせる。 ○ 幹の太さや、長さ、本末同大であることなど、吉野杉の特長に気づかせる。 ○ 林業のしごとの工夫や苦労に気づかせる。	(ア) ① (ア) ②
4. 見学で学んだことを振り返るとともに、吉野林業が抱える問題について考える。 ・ 密植、下刈り、間伐、枝打ち、年輪、節 ・ 輸入木材の増加や林業労働者の減少と高齢化	○ 密植と多間伐が良質な吉野杉を生み出していることに気づかせる。 ○ 見学を通して肌で感じてきたことと、吉野林業が直面する問題とを対比させ、自分ごととしてとらえさせる。	(ア) ① (ア) ② (イ) ①
5. 川上村や吉野林業の魅力について、自分なりに興味をもったことをまとめ、交流する。 ・ 東吉野小学校との交流	○ 互いに、それぞれの地域の魅力に気づけるようにする。	(イ) ① (ウ) ①
6. 自分たちには何ができるのかを考える。	○ 個々の認識のちがいに留意し、自分なりの考えをもって、表現できるようにする。	(イ) ①